

令和 3 年 6 月 29 日現在

機関番号：13101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K13685

研究課題名（和文）曾祢益の足跡とその外交思想 日本社会党右派・民社党の外交路線に関する歴史的研究

研究課題名（英文）Life and international thought of Sone Eki: A historical study on the foreign policy line of the rightist socialists in postwar Japan

研究代表者

神田 豊隆 (Kanda, Yutaka)

新潟大学・人文社会科学系・教授

研究者番号：70609099

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本課題は、戦前において外交官、戦後に政界入りし、社会党右派・民社党の中心人物の一人となった曾祢益の伝記研究を行ったものである。その外交論の変遷を中心的主題として、時系列順に、特に以下の点についての解明を試みた。戦前の外務省内の路線対立における曾祢の位置、占領期とりわけ片山政権期における曾祢の役割、講和論争における右派外交論の実像、左右社会党統一の際の外交政策の策定、安保闘争と初期民社党の外交路線の策定過程、民社党内の諸勢力の競合と外交路線の対立、などである。本課題はとりわけ、戦後革新勢力の外交政策の戦前との連続性の解明や、先行研究の薄い革新勢力右派の外交論の検証という点で重要性を持つ。

研究成果の学術的意義や社会的意義

社会党に関する先行研究においては、右派への関心は乏しい一方で、社会党がなぜあれほど左傾化し、現実路線に転換出来なかったのかという問題意識は広く見られる。また社会党の対外政策に関する先行研究は、同党の対米ないし対中ソ政策に議論を集中させてきた。右派外交論の中心人物の一人として、時に西欧社民勢力を模範としつつ現実路線を模索した曾祢の足跡を描くことは、こうした点で学術的重要性を持つ。

加えて今日の日本政治の課題は、政権交代の可能な現実的な第二勢力を形成することであり、とりわけ外交問題は重要な争点である。曾祢の長年の努力から、こうした現代的な課題へのヒントも見えてくるはずである。

研究成果の概要（英文）：This project aims to complete a biographical study of Sone Eki, a politician and foreign policy expert who was in foreign service until 1945 and was one of the leaders of the rightist socialists in postwar Japan. Focusing on his thoughts on international affairs, it particularly discussed the following points. 1) Sone's policy position at the wartime Foreign Ministry. 2) Sone's role in the politics under the US occupation, especially in the Katayama Administration. 3) The goals of the rightist socialists in the "Peace Treaty debate." 4) Bridging the foreign policy divide at the time of unification of socialists in 1955. 5) Constructing the foreign policy line of the Democratic Socialist Party. 6) Factional conflicts and foreign policy debates within the DSP. The significance of this project lies in analyzing the continuity of foreign policy of the postwar left from prewar era, as well as shedding light on the foreign policy of the rightist socialists, which has rarely been discussed.

研究分野：日本政治史

キーワード：日本社会党 民社党

1. 研究開始当初の背景

第二次大戦後を対象とする日本外交史の研究は、近年進展が著しい。しかし、そのうち大部分の研究は、歴代政権ないし保守勢力の外交を対象としたものであり、野党・革新勢力の外交政策への関心は乏しく、この点でややバランスを欠いている。むしろ、社会党の外交政策を論じた優れた業績は、一定数存在している。また、そのうち多くの研究は、社会党が過度に左派優位で、穏健な現実路線を採り得なかったことに否定的な評価を与えている。

しかし、にもかかわらず、彼らの中で現実路線を模索した社会党右派から民社党に連なる系譜を主題とした研究は、ごく僅かに過ぎない。とりわけ、多くの一次史料に基づいてその対外政策の歴史的意義を論じた本格的な実証研究は、ほぼ皆無に近いといつてよい。さらに、旧来の社会党の対外政策に関する研究は、主として安全保障の次元で、対米ないし対中ソ政策に関心を集中させてきた。だが一方で、社会党がとりわけ党レベルで密接な関係を有した西欧との関係や、アジアの地域秩序をめぐる論じてきた構想を、広い視野から検討しようとする試みなどは極めて乏しかった。

本研究が主題とする曾祢益(1903-80)は、戦前は外交官で、戦後、占領改革に一官僚として従事した後、片山哲政権に加わったことを契機に社会党入りし、右派に属した人物である。1960年の民社党結党時には初代の書記長を務め、その後70年代まで、同党の中で重要な存在であり続けた。曾は1950年代初頭の講和・安保をめぐる党内の論争、50年代前半の左右分裂、55年の統一、60年の民社党結成以後において、社会党右派ないし民社党を代表する論客として、その外交論を一貫してリードした。曾祢の名前はこれまで様々な文献で言及されてはきたが、その外交論が体系的に論じられたことは皆無であったといえる。それは従来、一次史料が未発掘だったことにもよる。

曾祢の生涯にわたる外交論の変遷を追うことは、従来必ずしも十分に論じられてこなかった社会党右派・民社党の系譜の対外政策の重要部分に着目することになる。また外交官から社会党入りした異色の経歴を持つ曾祢の足跡を追うことは、戦前の外務省から戦後の革新勢力への政策的継承という、未知なものに光を当てる可能性も有しているのである。

2. 研究の目的

以上の先行研究の状況を念頭に置いたうえで、本課題は、戦前において外交官、戦後1950年代以前において社会党右派(ないし右派社会党)、60年代以後において民社党の外交論をリードした曾祢益の全生涯を対象として、その外交思想の変遷を追いながら一つの伝記的研究を完成することを、その最終目的とする。概ね、曾祢の一生を下記のように時期区分し、それぞれについて、特に次のような論点を扱う。またその際、国内外のアーカイブ調査などを踏まえた多くの一次史料を活用し、本格的な歴史学的実証研究の完成を図ったものである。

(1) 生い立ちから外交官時代(1903-45年)

国際協調・大正デモクラシーの時代に曾祢はいかなる国際認識を育んだか。戦中期の外務省において曾祢はいかなる位置にあり、とりわけどのように終戦過程に関与したか。

(2) 社会党入党・片山内閣官房次長時代(1945-48年)

曾祢はなぜ社会党入りしたのか。占領下の各政治勢力の連携と対抗の中で、外務省出身者はどのような存在であり、曾祢は占領軍のどの勢力とどのように協力したか。

(3) 講和論争(1949-51年)

右派を代表する論客となった曾祢が求めた社会党像はどのようなものであり、特にその際、英国労働党など西欧社民政党はどのようにモデル化されたか。

(4) 社会党統一へ(1951年-55年)

曾祢も起草に当たった統一綱領、とりわけ左右両派が受け入れた枠組みとしての「ロカルノ方式」の安全保障構想は、どのような意義や国際的背景を持っていたか。

(5) 西欧・アジアとのネットワーク(1951-59年)

曾祢が参加した西欧の社会主義インターナショナル、アジア社会党会議、バンドン会議、

1959年の浅沼訪中などの実態はどのようなものであったか。

(6) 民社党初代書記長・外交委員長(1960-69年)

初期民社党の「民社党外交」の構築はいかなる形で行われ、初代書記長としての曾祚の役割はどのようなものであったか。

(7) 民社党非主流派・晩年(1970-80年)

晩年に至るまで続けた外交政策発信や、社会主義インター名誉議長など国際活動の実態、党主流の路線との関係、曾祚が民社党や革新勢力に残した遺産はいかなるものであったか。

3. 研究の方法

本研究は歴史研究であり、最も重要な作業は、一次史料の収集である。国内外のアーカイブにおける史料調査、関係者へのインタビュー、関係者を通じた史料へのアクセス、などを精力的に進めた。とりわけ、本研究特に上記2の(5)に関する部分については、一国の視点を越えた「国際関係史」視点が重要な意味を持っており、その意味でいわゆるマルチ・アーカイバル・アプローチの重要性は高い。

なお、最後の2年間については、新型コロナウイルス(COVID-19)感染症の影響による研究上の障害は小さくなく、いわざるを得ない。ただそうした中でも、オンラインでの可能な手段を活用するなどして、着実に成果を挙げることが出来た。とりわけ英語圏のアーカイブは、このパンデミック下でもインターネットの活用によって障害を乗り越えようという姿勢が顕著であり、そうした姿勢は本研究課題の遂行にも有益となった。

4. 研究成果

特に上記2の(5)に関連する成果として、共著論文集として、以下の文献の執筆に加わり、近く公刊される予定である。Michele Di Donato and Mathieu Fulla, eds., *The Left and the International Arena in the 20th Century: A Transnational Political History*(forthcoming)がある。

この他に、本課題の成果の一部、とりわけ1950年代の社会党に関する部分を反映した論文として、神田豊隆「日本社会党と戦後和解 村山談話の『社会党らしさ』」(波多野澄雄編『和解学叢書・政治外交編』(近刊))がある。

この他、別記の通り、国際学会を含めた口頭発表などがあり、また近い将来に本研究課題を総合的にまとめた著書を刊行するべく準備を進めている。

本研究は、戦前の外務省から、戦後の社会党右派・民社党に至る曾祚という人物の生涯を、多くの一次史料に基づいて描き上げたものである。この成果の意義として、特に次の3点を挙げたい。

第一に、上述のような西欧やアジア諸国との連携という「国際関係史」的視点で社会党の対外関係を描く研究は、これまで革新勢力の対外政策への関心自体が強くなかった日本政治史・外交史研究の中でなかったものである。さらに、各国で研究の盛んないわゆる冷戦史の分野においても、社会民主主義勢力の国際的ネットワークを対象とした研究は、世界的に見ても極めて少ない。特に、西欧・日本・アジアという広範囲の連携を扱った研究は皆無である。その意味で本研究の成果は、国際的にも発信する価値が高いものである。それが具体的な形で結実したのが上記の英文論文である。

第二に、本研究が描く曾祚像は、社会党左派のやや過度なイデオロギー偏向の是正を図った一方、同時に保守勢力の無原則な外交を克服しようとしたものである。社会党に関する先行研究では右派への関心は乏しい一方、「なぜ社会党はあれほど左傾化し、現実路線に転換出来なかったのか」という問題意識は広く見られる。その意味で、社会党左派と保守勢力の狭間でバランスの取れた外交路線を模索した曾祚の存在は、多くの研究者の関心を必然的に惹きつけるはずのみならず、広く一般的な社会的関心を集めるはずである。

第三に、今日の日本政治において重要な課題の一つは、政権交代の可能な、現実的な第二勢力を形成することである。外交問題は、その際とりわけ重要な争点である。自民党と一線を画しつつ、現実的な外交路線を模索した曾祚の長年の努力から、そうした現代的な課題へのヒントも見えてくるはずである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 5件）

1. 発表者名 Yutaka Kanda
2. 発表標題 The Murayama Statement as Socialist Policy?: The Japan Socialist Party and Postwar Reconciliation
3. 学会等名 “The Development of Reconciliation Studies in East Asia”（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 神田豊隆
2. 発表標題 日本社会党の外交政策と和解 村山談話の「社会党らしさ」
3. 学会等名 「和解学の創成～正義ある和解を求めて～」夏合宿
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yutaka Kanda
2. 発表標題 The Sea of Japan Region in the Longue Duree: Geopolitics, Transnational Networks, and the Future of Regional Cooperation
3. 学会等名 International Symposium 2020, "Regional Order in East Asia: Emergence, Development, and Future"（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Yutaka Kanda
2. 発表標題 Connecting Internationalists and Nationalists: Japan Socialist Party's Effort to Bridge the Socialist International and the Asian Socialist Conference in the 1950s
3. 学会等名 Seminar “Les gauches et l'international/The Left and the international arena,” Centre d'Histoire de Sciences Po（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 神田豊隆
2. 発表標題 冷戦期アジアにおける社会民主主義的地域秩序の試み 1950年代
3. 学会等名 新潟大学法学部東アジア地域研究プロジェクト=淡江大学日本政経研究所（共催）・日台国際ワークショップ「東アジアの地域ガバナンスと日本 20世紀国際関係史の視点」（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 神田豊隆
2. 発表標題 社会民主主義勢力の国際関係史 社会主義インターナショナル・アジア社会党会議・日本社会党
3. 学会等名 グローバル・ガバナンス学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Yutaka Kanda
2. 発表標題 Networking Non-Communist Socialists in Asia: The Socialist International, Asian Socialist Conference and Japan Socialist Party in the 1950s
3. 学会等名 首都師範大学歴史学院“比較視野下的東南亜国際関係”国際学術研究会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 Michele Di Donato and Mathieu Fulla, eds.	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Bloomsbury	5. 総ページ数 未定
3. 書名 The Left and the International Arena in the 20th Century: A Transnational Political History	

1. 著者名 波多野澄雄編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 未定
3. 書名 和解学叢書・政治外交編	

1. 著者名 Yutaka Kanda	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 294
3. 書名 Japan's Cold War Policy and China: Two Perceptions of Order, 1960-1972	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------